
神の血を宿りし者

がまがえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の血を宿りし者

【Nコード】

N7482B

【作者名】

がまがえる

【あらすじ】

神の勝手な考えで、神は消えて一人の男を産み出した。そして、この男を中心に運命の歯車が狂っていく…

プロローグ（前書き）

まだ初心者なので、いろいろアドバイスや意見など聞かせてください。感想も

プロローグ

この世には神がいる。

ある時、神は人間やその他の生物を作り出した。

その1億年後、神はある事を考えた。

（この人間に我の血を混ぜれば素晴らしい事になるぞ）と。

これを考えて神は血を、一人の産まれてくる子どもに混ぜた。

もちろん神が勝手に知らぬまにである。

神の血を混ぜられて産まれて来た子どもは、カイン・バーストと名付けられた。

カインは優秀だった。

人より完全に優れていた。

運動能力、知識、成長。

すべてが異様だった。

親はカインを可愛がった。

優秀な子だったからである。

そして神は神でなくなった。

神の掟を破ったので神としての能力が失われる。世を見る能力だけを残して。

これは知っていた事である。

そしてこの世から神が消えた。

10年後、カインは親を殺した。

第一話　頼み

人間とは何だ。

下等な生物め。

俺は人間じゃない。

俺は神だ。

小汚い部屋。あちこちに物がちらばっていて、何が何だかわからない。

その汚い部屋にある机で男は本を読んでいる。
カーテンのない窓から朝日がさしこむ。

そして、その部屋にいた一人の少年が目を覚ました。

「ふああ……」

あくびをする少年に男は本を閉じ口を開いた。

「やっと起きましたか。」

「ん……？ サムル！？ なんでここに！？」

「いやあ、あなたに伝えなければいけない事がありまして……」

少年がサムルという男に驚くと、サムルは冷静に、そして真面目な顔をして言う。

「ライラさんがお呼びですよ。…一時間ほど前から」

につこりいたずらつ子を思わせるような顔で笑いながら言い最後の一言は小声で言う。

「サムル……覚えとけよ……」

少年は一言残して部屋を飛び出し走り出した。

少年がいるここはムアラという村。

ムアラは森の奥にあり、村の住人以外は誰も村に来る者はいないくらしいの辺境の地だ。

少年はその住人だ。

そして今、少年を呼び出しているライラ。

このライラという人には、少年はいつも世話になっている。しかも怖い。

少年はライラのいる家に急いだ。

（そっぴゃ…変な夢だったな…）と思いながら。

と…その時、走る少年の前に急に男が現れた。

「おおー、アイルじゃないかあ！！なあにしてるんだあい？」

陽気すぎる感じで話しかけてきた男はムエカ。正真正銘のバカ男である。

少年アイルにはこんな奴かまってる暇はなかった。

「わりい、急いでんだ。」

そう言つてまた走り出した。

「あゝつれないねー」

なんて言いながらムエカは自分の家へ歸つて行つた。

アイルは一度振り返りムエカがいない事を見て（何をしたかつたんだ）なんて思つていた。

そしてやつとライラのいる家についた。

アイルは恐る恐るドアを開けた。

「…あのー」

「おそーい！！どれだけ待たせるつもりだぁ！！何してたんだぁ！！」

アイルがドアを開けたとたんにライラの怒鳴り声が耳に飛込んで来た。

「いやー…ちよつと…睡眠を…」

「ほう、なら私が睡眠を捧げようか？」

頭をぽりぽりかきながら言い訳しようとするアイルに満面の笑みでライラが言つ。

アイルが苦笑ししばらく沈黙が続いた。

すると、ライラが口を開いた。

「たく…今回は多目に見てやる。」

「ほ…。あ…で、何の用なんだ？」

「安心して話を変える。」

「ああ…お前に頼みたい事があるんだ」

ライラはそう言いながら何かを取り出した。

「剣？何か狩るのか？」

ライラが取り出した剣を見ながらアイルは聞いた。

「いや…森の果実を取ってきてくれ。ムエカとエンナを連れてな」

ムエカの名前を聞いてものすごく嫌な顔をするアイルにライラは言った。

「エンナを連れてくんだぞ」

エンナはアイルと同じ年の女だ。おとしやかで静かな感じの女。

何故かエンナの前ではムエカはおとなしくなる。何故かはわからない。

「しょうがないな…」

アイルが何故か調子に乗る。

ライラはおもむろに剣を握った。

そして三人は森へ出かける事になった。

第二話　森

森の中は木や草が生い茂っていて、光があまり届かず昼でも暗い。

しかも、ちゃんとした道もなく目印がなければムアラの住民でも迷うかもしれないほどだ。

その森をアイル、エンナ、ムエカの三人は果実を求めて歩いた。

アイルは13の時に初めてこの森に行った時、動物に出会い危険な目にあつた。

その時はムエカとサムルと一緒にいて助かった。

ムエカは18歳でアイルより3つ年上だ。

サムルは16歳。

アイルとエンナが15歳だ。

三人は目印を作りながら森の奥へ奥へと進んで行った。
だが、果実が見付からない。

すると、エンナが木を見回しながら口を開いた。

「果実… ないね」

「おかしい…。この前はかなりあつたのに」

エンナがいるせいなのか知らないが、いつもからは想像出来ないくらい冷静に言うムエカ。

アイルは二人の会話には耳もくれずにどんどん奥へ進む。

「ちょっと、アイル」

「一人で行くな」

二人がアイルを急いでついていく。

アイルはエンナはともかくムエカのあれは…調子が狂う…なんて思
いながら奥の木を見ると果実がたくさんなっていた。

「あつた!!」

アイルが果実を見つけ叫ぶ。

アイルの声にあわせ二人も果実を見つけた。

「こっちにもあるわ」

「あつたあつた」

と、二人ともせっせと果実をとりはじめた。果実を取るには弓を使
う。

だから、ムアラの人はほとんど弓の使い方がうまい。

アイルはこの場は二人に任せてもうちょっと奥へ行く事にした。

二人が夢中になっているすきに奥へ進んだ。

すると、何やらもう少し先の方から音が聞こえた。

何かの鳴き声みたいな音や何かを噛み砕いてるみたいな音だ。

アイルはなんだと思いながら恐る恐る音の方へと進んだ。

「なんだ……！？うわ…わああ！！！」

そして、目の前の光景に驚き声をあげた。

なんとそこには大きさがサッカーボールくらいの、目が大きく、口も大きく、するどい歯がぎっしりはえていて、耳も大きく、黒い見たこともない奇妙な謎の生物が二匹もいて、しかも動物を喰らっていたのである。

そして、叫び声に気付いた謎の生物がアイルを見て動物の血と肉でどろどろな口を開いた。

「人間じゃ…人間じゃ…。カイン様に知らせなくては」

そうにごった声で言った後、動物の死体だけを残し姿を消した。

そして、エンナとムエカがアイルの叫び声を聞き付けて急いでやってきた。

「どうしたの！？」

「大丈夫か！？」

二人が息を切らしながらアイルの方を見た。

屍餅をついてるアイルと食い散らかされた動物の死体。

エンナがおもむろに口を開いた。

「アイル…何て事を」

エンナは視線を反らし震えた声で言った。

アイルも震えた声で否定した。

「俺…じゃない」

「そんなに腹が減ってたのか」

ムエカが口を開いたが誰も聞いてなかった。

しばらく沈黙が続いた。

アイルは落ち着いたのか今見たことを説明した。

「……一回村へ帰りましょ」

「そうだな」

二人はあまりにも衝撃的で動揺していたが、アイルのさっきの様子からしてまんざら嘘じゃない気もしていた。

そして三人はたくさんの果実を持って村へ帰った。

第三話　夢

アイル達は村についてライラの家へ向かった。

森にいたからあまりわからなかったが、もう辺りも暗くなってきた。

アイルは静かにドアを開けた。

「ライラ」

「ん？おお、帰ったか。どうだった？」

アイル達に気付き座っていた椅子から立ち上がり近付いた。

そして、三人が持つてる果実を見て口を開いた。

「こんだけか？」

「え…少ないのか！？」

ライラの言葉に三人は驚き、みんな（これで…？）という顔をして果実を見た。

「…まあいい。明日も行ってもらうから」

怖い笑みを浮かべながら果実を受けとる。

苦笑しながらアイルは口を開く。

「ライラ…ちょっと」

「何だ？」

アイルは謎の生物の事をライラに話した。

「何か知らないか？」

ライラはしばらく沈黙していたが、アイルの顔を疑いの目で見ながら静かに口を開いた。

「…知らん。…疲れただろ。今日は休め」

アイルはライラが思いつきり疑つてるとわかって、唇を尖らせながら家へ帰った。

エンナもムエカも家へ帰った。

アイル宅

あれは何だったんだ…。見間違いか？でも喋ったし…。そういえばカイン様とか言ってたな…。カイン…。誰だ？
考えてもわかんねえな。寝るか。

アイルは電気を消して、布団に潜り込んだ。

……何だここ…やけに綺麗だな…。

何で俺こんなとこに…

宇宙のような場所に何故かアイルはいた。
幻想的な微かな光が所々から出ている。

「カイン…やめて…くれ」

うわ！？なんだ！？カイン！？

急にアイルの目に映像が飛込んで来た。

血だらけの男が10歳くらいの子どもに命ごいをしている。

「ふふは…人間はクズだ！！」

やめろー！！

カインは素手の手で血だらけの男を切り裂いた。

アイルは目の前で起こってるのが何故かわからなかった。

カインと呼ばれる子どもが血だらけの男を切り裂く。見えてるだけで止める事もできない自分。

なんだ……？

なんなんだよ…。

意味がわかんねえよ…。

うわ…

うわー！！！！！！

「うわー！！！！！」

あちこちに物がちらばって小汚い部屋。

アイルの部屋だ。

アイルは大声で起きた。

「……夢……？」

「…随分と騒がしいお目覚めですね…。大丈夫ですか…？」

汗だくになって息があらいいアイルにサムルが静かに言う。

「サムル！？なんでまたいるんだ！？」

驚くアイルをよそに冷静に口を開く。

「…果実取り…私も行けと言われまして」

「そう…か…。はは」

溜め息をつくサムルに苦笑する。

そして、服を着替えてから外に出る。

外にはもうエンナとムエカもいた。

「やっと来たか」

ムエカはエンナがいるからまた真面目だ。

普通に考えればこっちの方がいいんだが、ムエカがこれは気味が悪い。

「遅いです。また寝坊？」

エンナが首を傾げ優しそうに微笑む。

「さて…行きましょうか」

サムルはいつでもマイペースだ。

そして三人は森へ向かった。

第四話　ムアラ

四人はアイルとエンナとムエカが昨日行った場所に行く事にした。森は別に昨日と変わった事はない。

四人はどんどん歩いていった。

そして昨日の場所よりちよつと奥で取り始めた。

アイルは一人、昨日あの謎の生物を見た場所に黙って行った。

「なにもない…か」

アイルは昨日みんなでたてた動物の墓を見ながらぼつとした。

そして、果実取りを始めた。

四人は何事もなく果実を取り、森へ帰る事にした。

四人が森を歩いてると、急に森がざわついた。木がしなり、風がなり、草がゆれ、鳥達が一斉に飛んでいき、動物達のおたけびが聞こえた。

アイル達は驚き立ち止まった。

「なんだ…!？」

すると、サムルが村のある方の上空を見て驚き、叫び走り出した。

「……………早く…早く村に帰りましょう！！！」

アイル達はサムルが急に走り出したのを追いつけるだけで、何が起こったかわからなかった。

エンナがサムルの言った言葉に聞いた。

「村が……………何かあったんですか…！？」

走りながらとぎれとぎれに言葉をはつする。

アイルとムエカとエンナの三人はサムルの答えを待ちながら走った。

そして、サムルが前だけを見て走りながら口を開いた。

「…村が…燃えてる……………！！」

アイル達はその言葉に絶望し、何か祈るように村へ向かった。

そして四人は村の入り口についた。

四人が見たのは、見たことのない…いやアイルは昨日見た事のある謎の生物の大群が村を襲っていたのである。

火を放ち、住人が所々に倒れている。

その生物の中に一人人間がいた。

アイルは見た事がある…いや…実際には見た事がない。

アイルは立ち尽くして口をこぼした。

「……………カイン……………」

ムエカが急に落ち着いた口調でアイルとエンナに言う。

「アイル、エンナ。逃げる」

「ここは私たちに任せなさい」

ムエカとサムルは武器を取り戦う準備をした。

「逃げろって…俺も…戦う…」

アイルは恐怖に満ちた顔をしながら、震えた声で震えながら武器をにぎった。

エンナは目の前の光景があまりにも悲惨だったので顔を抑え泣き出した。

「…大丈夫ですよ。心配いらないです。」

アイルとエンナを見てサムルがやさしく微笑み言った。

「はっは。早く行けえ。心配するなあ!!」

エンナがいるがいつものように陽気にアイルに言う。

「アイル……行けえ!!!!」

サムルが武器を構えて生物達のいる方へゆっくりと歩きながらアイルに叫ぶ。

「……ムエカ…サムル……わかった!!」

アイルは武器をしまい、涙をこらえて無理に笑顔になりながらエナの腕をつかみ森へ逃げていった。

「サムル…お前も行つていいんだぞ？」

敵を前に武器を構えながら陽気なムエカ。

「緊張感のない人ですね…。ほら…来ましたよ」

陽気なムエカに呆れながら武器を構え、敵をにらむサムル。

「人間………クズめ!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482b/>

神の血を宿りし者

2010年11月19日16時32分発行